

浸水経験を活かした地域独自の避難情報の発令基準

入曽地区では、不老川氾濫による浸水をきっかけに、住民が市と共に避難情報の発令基準を見直し、浸水時の状況を記録するため防災マップを作成した。今後は、防災マップから見えてきた課題等を検討・伝承するため、担い手の育成に励む。



平成 28 年不老川の堤防決壊

入曽地区の地域の特徴は？

室岡さん：入曽地区の世帯数は現在、15,488 世帯です。地区には 24 の自治会があり、それらの自治会が入曽地区自治会連合会を組織しています。

入曽地区の中心には不老川という川が流れております。不老川はかつて日本でワーストとなるような汚れた川でしたが、昭和 60 年(1985 年)に地元の方々が中心となり「不老川をきれいにする会」を結成し、浄化活動が始まりました。その結果、今では本当に綺麗な川になっています。その不老川が今回の地区防災計画策定に大きく関係しています。

地区防災計画を策定したきっかけは？

関口さん：平成 28 年(2016 年)8 月の台風第 9 号で不老川の 4 か所で堤防が決壊して、約 300 世帯が床上・床下浸水になったことです。当時、市長・関係部課長・不老川流域自治会長等で対策会議を重ねました。不老川からの水を貯めるために、航空自衛隊入間基地の南側に調節池がありますが、その調節池からも水が溢れてしまいました。

以前にはなかったような大雨が降ったことや、地区の都市化が進んだことで雨水が土に吸い込まれなくなったことも一因かと思えます。



浸水の様子

橋本さん：台風の後、狭山市と不老川流域の自治会長が集まって、被害状況や、なぜ避難情報が早く出なかったのかなどの問題点を話し合いました。私たちはどのような基準で避難情報が出されるのかが分かりませんでしたし、行政の方もどのタイミングで不老川流域の住民に避難情報を出せばよいのかが明確に決まっていなかった。それで、雨量や調

節池の水位がどの程度であれば避難情報を出すのが話し合われました。その中で、市の当時の防災計画には不老川の氾濫については書かれていなかったため、「それでは地区防災計画を協力して作りましょう」ということになったのです。

横瀬さん：地区防災計画の策定に向けて動き出したのは、平成 29 年 6 月頃からです。狭山市の危機管理課から、計画について各自治会など関係者にお声掛けして、「入曽地区防災計画策定協議会」が作られました。

協議会のメンバーは、不老川流域の自治会長、消防団、社会福祉協議会、民生・児童委員、小・中学校などの関係者です。協議会のメンバーに参加いただき、7 月から翌年 1 月にかけて月 1 回のワークショップを開催し、最終的に計画が出来たのが平成 30 年 3 月でした。



協議会の様子

策定プロセスは？

室岡さん：ワークショップにはオブザーバーとして、地区にお住まいの市議会議員にもご参加いただきました。また、ファシリテーターとして、埼玉県の自主防災組織リーダー養成指導員の認定を受けた方に会の進行をしていただきました。

ワークショップでは、毎回テーマを決め、不老川氾濫時の状況に応じて地域を 2 グループに分けて議論していただきました。

さらに、情報共有するには皆さんの目で現場を見るのが一番なので、地区を歩き、どこまで浸水したかということを確認しました。その上で、課題を洗い出し、対策を考えました。ワークショップの資料作りや、地区防災計画の文章の作成については、市の危機管理課が支援しました。

横瀬さん：その中で、地区防災計画と合わせて、浸水した地域や浸水当時の水の流れを地図上に書き込んだ「不老川流域防災マップ」を作ろうという話になりました。

橋本さん：不老川流域の自治会にはマップを全戸配布しました。マップ作成資金の一部は、狭山市の「まちづくり事業助成金」を充てましたが、不足分は各自治会で負担していただきました。

マップを作ったことで、地区の課題が明らかになったことは成果と言えます。例えば、不老川が氾濫したら、避難所の対岸の住民は避難所に行けないのではないかということも話の中で出ました。今後は、マップを見ながら細かいところをどうするか検討し続けることが課題ですね。



マップ作りの様子

計画策定において工夫した点は？

橋本さん：地区防災計画には、入曽地区の現状と課題、防災・減災に向けた取組などが書かれていますが、これはワークショップに参加した皆さんの発言を市の支援のもとまとめたものです。また、地区防災計画には、不老川流域の「避難準備・高齢者等避難開始」発令基準が明記されています。これは入曽地区独自の基準です。不老川氾濫の経験を踏まえた話し合いの結果、市に基準を決めていただきました。

室岡さん：市が作る計画とは違って、地区防災計画はボトムアップで作っていくものかと思います。地域の方々の地域愛だったり、防災に対する意気込みだったり、魂のようなものを込められるのが地区防災計画だと思うので、そうした思いをなるべくストレートに計画に載せられるように工夫しました。

計画の意義、効果は？

橋本さん：一つの自治会だけでは、地区の防災を進めることは出来ません。地区防災計画を作ることで、行政との関係も強固になります。それにより、組織として自治会も強力になりますし、住民への周知もより効果的に行うことができるようになります。



左から室岡さん、横瀬さん、橋本さん、関口さん

す。計画を地域の基礎として、防災をさらに進めていきたいと思っています。

今後の課題は？

橋本さん：平成 30 年度は、計画に基づいた防災訓練を実施しました。参加者全員で不老川流域を歩き、公民館で土嚢づくりなどの実習をしています。今年、不老川流域にある自治会では、訓練のカリキュラムの中に浸水を想定した訓練を入れる予定です。

横瀬さん：地区防災計画が形骸化しないように、新たな組織として入曽地区防災計画実行委員会を立ち上げました。

室岡さん：地区防災計画が出来上ったばかりで、今後の課題は多いですが、「小さく生んで大きく育てる」ということができればと思います。そのために、実際に災害が起こった時の担い手の発掘や育成が必要です。それと並行して、地域の皆さんで防災対策を具体化していただけるように、実行委員会で行動計画を作ることが今後の目標です。

橋本さん：入曽地区には自主防災組織がない自治会もありますので、そこに自主防災組織を作る必要があります。それと人材の発掘です。消防団の OB、行政の危機管理の OB などを協力員として、組織の中に取り込めたいと思っています。また、地震対策をどのようにするかも今後の課題です。今、心配しているのは、不老川の氾濫から 3 年が経って、住民の危機感が薄くなっていることです。最近是不老川が溢れたという話題が住民の間で出なくなっていることが怖いと感じています。

関口さん：地区防災計画は作って終わりということではありません。計画を踏まえ、これからも防災を続けていくことが大切です。自治会のメンバーは変わっていきますので、新しい人への引継ぎの時には、最初から説明する必要がありますが、そうしたことはこれからもずっと続けていきたいです。

取材協力：（以下、取材当時の所属・役職）
狭山市入曽地区自治会連合会会長 橋本良春さん
入曽地区自治会連合会相談役 関口武男さん
狭山市市民部入間川地区センター所長 横瀬康裕さん
狭山市市民部危機管理課危機管理防災担当主事 室岡辰哉さん
取材日：2019 年 7 月 24 日